

道元禪師様曰く 大身得ること難し、仏法値うこと希れなり、今我等宿善の助くるに依りて已に受け難き人身を受けたるのみに非ず、遇いがたき仏法に値い奉り、生死の中の善生、最勝の善なるべし、最勝の善身を徒にして露命を無情の風に任すること勿れ」と人間として生まれたこと自体尊いと言う事です。我等人間に生まれたからこそ懺悔をすることが出来るからです。

人間は自我により自分を見失いやすいものです。梶井基次郎の小説「泥濘」に「影の中に生き物らしい気配があらわれて来た。何を思っているのか確かに何かを思っている、影だと思っていたものは、それは、生々しい自分であった」と、人間の臭みがとても面白い表現で出てると思いました。

浄土門に帰属する僧であっても、念仏を商売にするは偽善者なり。称名は商品の口上とは違います。嘘・偽りを以って称えるものでも無い。念佛自体が阿弥陀様であり、尊いものです。

亡くなられましたが天台座主であられた山田恵諦上人は 大々を幸せに導いていく為には、さまざまな方法があり、宗派がある。しかし間違っただけではないのは、宗派の為の宗派、宗祖の為の宗派ではないということです」と述べてみます。私も宗派は仏教という大道から流れ出た細い支流であると思っています。人々の生活が真善美の中に行き渡り物心両面での幸せが**自己共に来ること**です。信心とは面白いものです。多くの方は**現世利益**を求めて祈願をなさいますが、それも「喜一憂で、願いが叶ったか否かで、信仰も芽生えたかと思えば枯れたり、滑稽です。現世の仕合せばかりを信仰に求めますと、とても忙しく安住の状態には中々させてくれません。本来信心は快樂にして禅定に入ると言われています。信仰は祈願した事が叶うと叶わざるとに関わらず心の支えにならなくてはならないものです。新しい宗教団体には色々あります。安易な変更、行動はいかがなものかと思えます。悩みにつけ込む宗教はありません。我々は身の丈に即応しない欲望は持たない方がよいと思えます。私は四国遍路をしますが巡礼中は欲徳も考えず、社会の情報からも離れ、自己も無く他も無く、何回巡っても常に初回、勿体なくも只々空海大師様との同行二人を味わいながら感謝・感謝で札所を巡る訳です。こんな素晴らしいひと時を四国の巡礼路は与えて下さるのです。

人間の一生には幼年期・少年期・青年期・壮年期・老年期等に分けることも出来ませんが、生きていくには**年齢に関係なく外圧 内圧に耐え**、それを肥やしにして成長していく訳です。生まれ出ると社会の一員となる。社会生活は一種の戦場にある訳で、まずは生命の維持、母乳を飲む事から始まり、色々な試験を乗り越え、社会の荒波を乗り越え、病氣にも打ち勝ち、老体に鞭打つも、やがて四大不調身動きもままならず、家族とも離れ、一人黄泉の旅に出るのです。貞心尼の詠に「きしにのさかひはなれてすむみにもさらぬわかれの あるぞかなしき」と、生まれたら死ぬのは当たり前前、時には心呻吟ふ人生街道、**信仰は心の癒し薬**「何時何処でお求めになりますか。